

ブクブクは、「ゴホン、ゴホン。」と、せきを続け、とうとう何千人という兵を一人も残さず、はき出してしまいました。その一番最後にとび出した兵隊は、ブクブクの鼻のあなへとびこんで、もがいていました。ブクブクは、「うるさいね。」と言って、クシャンと、くしゃみをしました。するとその兵隊は、バタンと鼻のあなからふきとばされて、馬といっしょにコロコロころがりながら、にげていきました。ごてんでは王子と王女とのこん礼の式をあげることになりました。それで、王女のお父さまの王さまにも来ていただかないといけないというので、王子はいそいでナガナガをおつかいに出しました。ナガナガは例の足でヒョイヒョイと、一度に一里ずつまいで、すぐに向こうの王さまのごてんへ着きました。見ると、さっきの兵隊たちは、馬でにげて行たくせに、まだ一人も帰り着いていませんでした。ナガナガは先に着いたのを幸いに王さまに向かって、兵隊の大しょうの命を許しておやりになるように、よくおねがいしてやりました。それでないと、大しょうは王女をとりかえさないで空手で帰って来たバツに、きっと首を切られるに決まっていました。王さまは、王女のおむこさんがそういう立ばな王子だったと聞くと、おおよろこびで、すぐにおともをつれて、王子のところへ出ていっしやいました。それでこん礼の式も、とどこおりなくすみ、王子と王女はいつまでも仲良く、幸せにくらしました。王子を助けているんな大てがらをした、ブクブクとナガナガと火の目小ぞうの三人は、王子からとってもたくさんのごほうびをいただき、ここにいてほしいという王子のすすめを断って、また三人がそれぞれ、旅に出たということです。